

小・中 合同

令和4年度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法（研究構想図）	2
V	研究の内容	3
1	研究主題に迫るための手だて	3
2	実践事例	4
	〈実践事例 1：小学校第 3 学年〉	4
	〈実践事例 2：小学校第 5 学年〉	6
	〈実践事例 3：小学校第 5 学年〉	9
	〈実践事例 4：小学校第 6 学年〉	12
	〈実践事例 5：中学校第 3 学年〉	14
VI	研究の成果と課題	16

研究主題

持続可能な社会を目指す未来の創り手の育成 ～自分のこととして考え、社会に参加する～

I 研究主題設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また、急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。そのため、一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが求められている。

平成30年度「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（内閣府）では、「社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい」という問いに対する肯定的な回答は、ドイツ75.5%、アメリカ72.6%、韓国68.4%であったことに対し、日本は42.2%と、調査対象7か国の中で最も低かった。また、「令和4年度全国学力・学習状況調査」（文部科学省）における、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。」という問いに対する肯定的な回答の割合は、小学校が51.4%、中学校が40.8%であった。このことから、子供の社会の担い手としての意識が低いことがうかがえる。

東京都では、令和3年3月に「東京都教育施策大綱」を策定し、「未来の東京」に生きる子供の姿として、「未来を切り拓く子供たちには、進化し続ける先端技術をどう使い、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を、自ら考えだすことができる力が求められます。」等の求められる資質を示している。

また、小学校（中学校）学習指導要領には、総合的な学習の時間の目標（3）には、「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。」と記されている。

さらに、小学校（中学校）学習指導要領解説総合的な学習の時間編には、改訂の趣旨として、特に探究的な学習の実現に向けて、「総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにすることについては学校により差がある。これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることが求められている。」と示されている。

このことから、積極的に社会に参画しようとする態度を養うためには、社会との関わりや社会参加の意識を高めていくことが大切だと考えた。

子供が当事者意識をもって社会参加の意識を高めることができるようにするために、実際に社会で活躍する大人や身近にある地域資源など、自分と社会とのつながりを実感できる課題設定をすることと、子供の発達の段階に応じた社会参加の場を設定することが有効だと考え、研究主題を「持続可能な社会を目指す未来の創り手の育成～自分のこととして考え、社会に参加する～」と設定した。

II 研究の視点

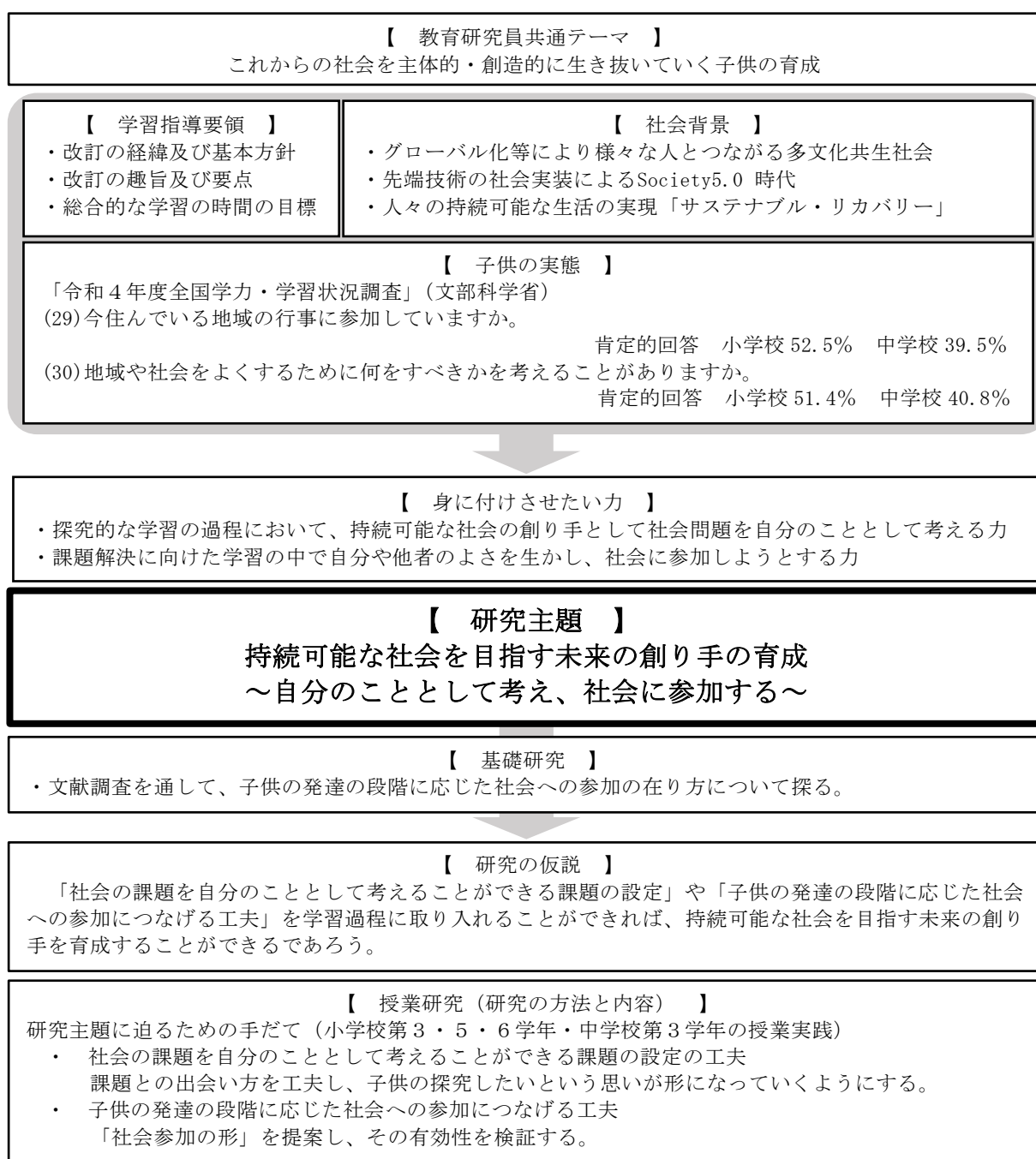
本研究を進めるにあたり、次の2点を研究の視点とした。

- ・ 社会の課題を自分のこととして考える。
- ・ 発達の段階に応じて社会に参加する。

III 研究の仮説

「社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定」や「子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫」を学習過程に取り入れることができれば、持続可能な社会を目指す未来の創り手を育成することができるであろう。

IV 研究の方法（研究構想図）



V 研究の内容

1 研究主題に迫るための手だて

(1) 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

実際に社会で活躍する大人や身近にある地域資源など、自分と社会とのつながりを実感できる課題設定をした。

地域資源の活用…地場産業養蚕との出会いからカイコ飼育	(実践事例 1)
給食の残菜量削減	(実践事例 2)
平和遺産を活用したプロジェクションマッピング	(実践事例 5)
外部人材の活用…区役所職員による出前授業や地域住民へのアンケートを通じた理想の町づくり	(実践事例 3)
地元大学や専門家と協働した町歩きによる町のよさの発見	(実践事例 4)

子供にとってより身近な人、もの、ことと直接関わる体験活動を行うことで、今、目の前にある課題は、「自分にも関係していることである。どうにかしなければならない。」「自分なら〇〇のように解決してみたい。」と思えるよう、課題に対し、当事者としての意識を高める課題設定の場の工夫をした。

(2) 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

総合的な学習の時間を通して、自ら社会に関わり参画しようとする意思、社会を創造する主体としての自覚が、一人一人の子供の中に育成されることが求められている。その意志や自覚は、すぐに身に付くものではなく、子供の発達の段階に応じて徐々に身に付くものである。そこで、子供の発達の段階に応じた社会への参加の形について、子供の学習経験や実態を踏まえ、それを実現するための活動例を検討し、「社会参加の形」を設定した。

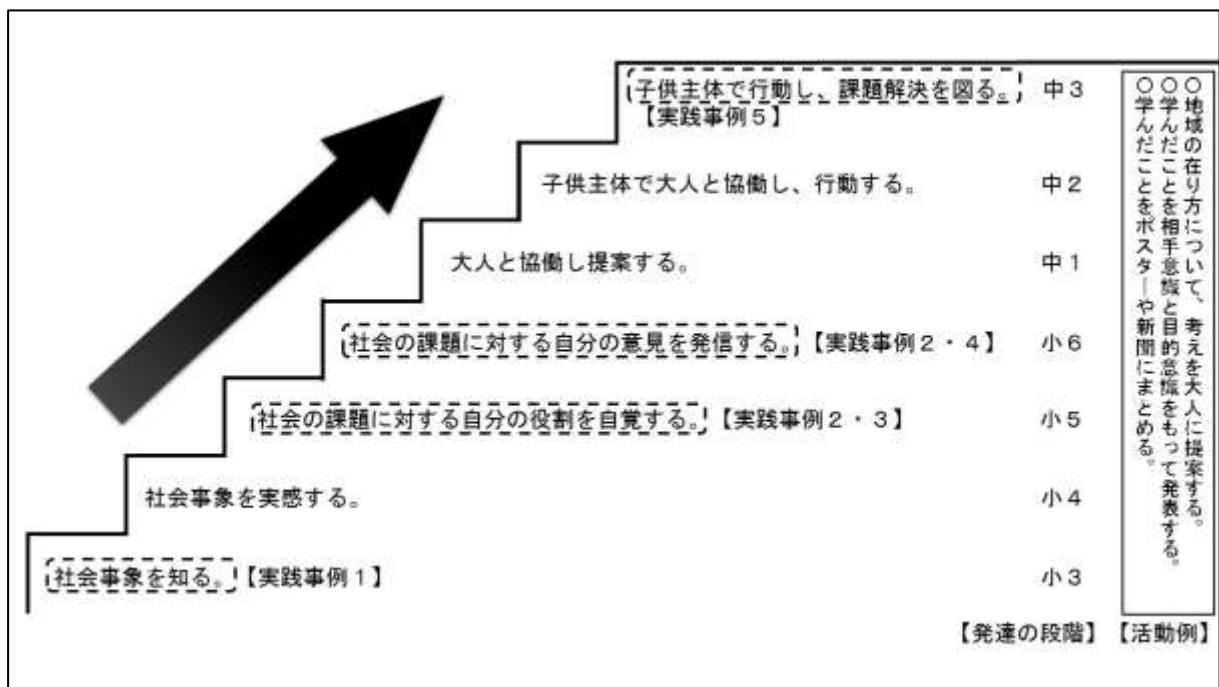


図 1 社会参加の形

2 実践事例

実践事例1 大発見！昭島博士になろう

～カイコ、マユのひみつ・地下水のひみつ・アキシマクジラを見つけた～（小学校第3学年）

(1) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

地域の特徴を調べたり、地域の方に聞いたりする活動を通して、学校の歴史や地域を知り、環境を守っている人たちがいることに気づき、自分たちにもできることはないかを考え、できることを実践する。

イ 評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
①養蚕、地下水、アキシマクジラなどに関する課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解しようとしている。 ②調べたことや考え方を互いに広げたり、可視化したりするために、適切な技法を活用している。	①養蚕、地下水、アキシマクジラなどに関する課題設定をしている。 ②課題解決に向け、身近な人に聞いたり、本やインターネットを活用したりして、必要な情報を集めている。 ③集めた情報から、必要な情報を選び、比較・分類・関連付けて考えている。 ④相手や目的を明確にした上で、探究してきたことを生かし、表現方法を工夫して、発信している。	①養蚕、地下水、アキシマクジラなどに関する課題の探究活動に進んで取り組もうとしている。 ②課題解決していく際、他者と進んで関わり、自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりする中で、新たな考えを生み出そうとしている。 ③探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参加しようとしている。

(2) 単元設定の理由

子供が住む地域は、養蚕・地下水・アキシマクジラの発掘などの特徴がある。それらを調べ、体験活動や見学などにおいて、主体的に学習活動に参加できる場を多く設定することで、地域のよさに気づき、探究活動を展開する。自分の地域の素晴らしい特徴を知り、発信することで地域愛を深めたいと考えた。

(3) 単元指導計画【全52時間 ○内は時間数】※研究に関わる部分を太字で表記

	□主な学習内容 罫：課題設定、罫：情報の収集、罫：整理・分析、罫：まとめ・表現 ・学習活動 【評価】
う かせにあきしまは ②	罫 昭島市の特徴、カイコ、地下水、アキシマクジラについて考え、課題設定をする。②【知①・思①】 ・昭島市の特徴について知っていることを思い付くままにウェブマップを書く。 ・校内のアキシマクジラや地下水の紹介、桑の葉がどこにあるかを見付ける。
カイコのひみつ ⑩	罫 カイコの飼育方法やマユのことを本で調べたり身近な人に聞いたりする。⑧【思②・主①】 ・学級でカイコの飼育体験をする。 ・カイコの卵を観察し、飼育をしながらその育ちを観察する。 ・一人一人が飼うカイコの飼育箱の準備をする。 ・カイコのまぶしを考え、作る。 罫 カイコがマユになる過程を整理する。②【知②・思③】 ・育ち方や世話の仕方を確認する。 ・観察したカイコの育ち方を整理する。 罫 カイコを育て、知ったことや分かったことをまとめる。①【思④・主③】 ・カイコがいた糸からマユが作られることで、分かったことを話し合う。

マユのひみつ⑩	<p>調 マユからできるものについて考え、マユ人形作り等の取組につなげる。②【知①・思①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マユからできることを、情報交換をする。 ・マユ人形作りや糸取りの計画を立てる。 <p>調 マユからできることの情報を収集する。⑤【思②・主①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マユ人形のデザインを考え、作る。 ・マユの糸取りを本で調べ、マユの糸取りの準備をし、糸取りを行う。 <p>整 マユからできる活動を通して、分かったことを整理・分析をする。②【知②・思③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マユ人形の家を図画工作科で制作することを提案する。 ・糸取りをしたことをまとめる。 <p>伝 カイコやマユで知ったことや考えたことをまとめ、友達に伝える。①【思④】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カイコについて知ったことをまとめたワークシートや育ち方の写真を見せ合う。
地下水のひみつ⑩	<p>調 地下水について知っていることを再確認し、調べ方を話し合う。①【思①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下水の情報を確認し、給水スポットの写真を見て社会科の教科書を読む。 <p>調 地下水について、様々な手段で情報を集める。④【思②・主①②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水道局のゲストティーチャーから地下水の話聞く。 ・給水スポットの場所を地図で調べる。 <p>整 調べたことを基に地下水キャラクター作りやクイズなどを作成する。④【知②・思③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下水キャラクターの仲間を考え、友達と比較する。 ・知ったことを整理し、選択制の地下水クイズを作る。 <p>伝 地下水について知ったことや考えたことをまとめ、友達に伝える①【知④】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作ったクイズが解答できるか確かめる。
たアキシマクジラ見つけ⑩	<p>調 アキシマクジラについて知っていることを再確認し、調べ方を話し合う。①【知①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アキシマクジラの情報を確認し、社会科の教科書を読む。 <p>調 アキシマクジラについて、様々な手段で情報を集める。④【思②・主①②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本やインターネットで調べたり、教育福祉総合センターで学芸員の話の聞いたりする。 ・家族や身近な人にクジラのキャラクターを使った場所や品物を聞く。 <p>整 調べたことを基に、歴史、化石、町の中の使われている物を整理する。④【知②・思③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アキシマクジラの大きさを実際に測り、絵で表現し、海の生き物の絵を描く。 <p>伝 アキシマクジラについて知ったことや考えたことをまとめ、友達に伝える。①【主③】</p>
うかせにまはる⑨	<p>調 発表したい内容を決め、再度まとめていく。①【知②】</p> <p>整 ポスター、クイズ、紙芝居、劇、体験活動などのグループを作る。⑥【思④】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表内容を練習し、意見を伝え合う。 <p>伝 学習発表会で他学年、保護者へ発表する。②【主②④】</p>

(4) 考察

ア 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

自分たちの住んでいる地域の特徴を知り、探究したいという思いを形作るために、体験活動やゲストティーチャーの講話、地域見学などを行った。子供が毎日水を使用する中で、「これは、水道局の方が24時間見守っている地下水だね。寒くなったから、水が冷たいね。」という会話が聞かれるようになり、水道周りを綺麗に掃除するなど、水を大切にする意識がより一層高まった。

イ 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

「社会への参加の形」の始めの段階として、地域の特徴を調べたり、体験をしたりする活動を教員から提案した。子供は、地域の特徴を調べ、体験活動を通して、歴史や先人たちの知恵について学び、学んだことを校内に発信したいという思いが生まれた。子供は学んだことを紙芝居やポスター、劇、クイズ等を通して表現し、友達、他学年、保護者に発表した。拍手や感想をもらうことで、自信をもって取り組む姿が見られた。

実践事例2 食品ロス0プロジェクト（小学校第5学年）

(1) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

学校給食の残菜が多いという問題に取り組むことを通して、日本における食品ロスの現状について理解し、食品ロスを削減するための方法に関する調査や、自らの生活を見直すとともに、これからの社会のために自分ができることを考え実践しようとする態度を養うことができる。

イ 評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
①食品ロスの問題について知るとともに、自分たちの生活と関わっていることを理解している。 ②問題に対してアンケート調査などを、目的や場面に応じた方法で実施している。 ③自分たちで給食メニューを提案したり、学習発表会で発表したりすることは、探究的に学習してきたことの成果であると気付いている。	①食品ロスの問題解決について、データや食品ロスの問題解決の必要性から課題を設定し、解決に向けて自分たちにできることを見通している。 ②学校給食及び地域にある店舗や各家庭の実態をよく理解するために、必要な情報を調査する対象に応じた方法や内容で情報収集している。 ③食品ロスの問題解決のために必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関連付けたりしながら、学校全体や家庭・地域と協働して、問題の解決について考えている。	①食品ロスの問題に関心をもち、自分自身の生活を見直し、積極的に探究的な学習に取り組もうとしている。 ②調べて得た知識や友達の多様な考えを生かしながら、協働して問題解決に取り組もうとしている。 ③給食メニュー提案や学習発表会での発表を通して、食品ロスの問題解決のための行動が自分たちの生活との関わりがあることに気付き、この問題解決の重要性を伝えようとしている。

(2) 単元設定の理由

食品ロスの問題は、世界的な問題となっている。SDGs の目標 12「つくる責任 つかう責任」にも解決目標が示されている。このような地球規模の課題に取り組むために、まず子供にとって身近な学校給食の残菜を減らすことから始めることとした。そうすることで、子供たちは食品ロスの問題を自分のこととして考え、解決策を見だし、発信するなどの行動ができるようになると思った。

(3) 単元指導計画【全 45 時間 ○内は時間数】※研究に関わる部分を太字で表記

	□主な学習内容 罫 ：課題設定、 罫 ：情報の収集、 罫 ：整理・分析、 罫 ：まとめ・表現 ・学習活動 罫 【評価】
給食の残菜を0にしよう⑭	罫 コンビニ弁当を例に、食料自給率、食品ロスの実態を知り、課題意識を高める。③【知①・主①】 ・日本の食品ロスの量や、自分たちの学校給食の残菜量を数値で示し、違いを感じる。 罫 ゴール（給食の残菜を0にする。）に向けて、仮説を立てる。①【知②・思②】 ・自分たちの学級と、学校全体の給食の残菜量の違いを確認する。 罫 仮説検証のために、調べることを決め、各グループで調査する。③【知②・思②】 （グループ例）残菜量チェック、好きな給食アンケート調査、給食を残す原因の調査、子供の食べ物の好き嫌い調査等 罫 各グループで調べて分かったことを共有する。①【思③・主②】 罫 情報を比較・関連付けして、学校給食の残菜量削減に向けた取組を考案する。②【思①】 （取組例）好きなものの給食献立を立案する。 配膳の仕方の工夫を提案する。 調理員の方の工夫と努力を伝える。等 ・調査して明らかになった学校の実態や栄養士から聞いた献立作りの工夫を基に、給食の献立を立案する。 罫 考察した取組を全校に呼び掛けるためのポスターや動画、スライドを作成する。③【知③・主③】 罫 立案した給食の献立を栄養士に提案する。①【知③・主③】 ・調査を基に考えたということを提案理由にして、献立を栄養士に提案する。

食品ロスの実態を調べよう⑭	<p>【主】学校給食について取り組んだことを振り返る。①【知③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが提案した献立が実現すると給食の残菜が減るだろうという仮説を振り返り、期待をもつ。 <p>【関】食品ロスの問題は学校給食だけでなく、家庭・地域においても取り組むべき課題であることを理解し、課題を設定する。①【知①主①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元始めの提示資料を再度示すことで、日本の食品ロスの問題について視野を広げる。 <p>【関】各家庭で行っている取組を調べる。①【知②・思②】</p> <p>【関】地域にある店舗や普段利用している店舗の食品ロス削減への取組を調べる。②【知②・思②】</p> <p>【整】家庭や店舗の取組に対して消費者として「私たちができること」を視点に情報を整理する。②【思③・主②】</p> <p>【主】相手意識・目的意識をもって、整理した情報を基に食品ロス削減につながるポスターや新聞、動画等を作成する。⑤【主②主③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰に伝えるのか、何のために伝えるのかについて考える。 ・レイアウトの様子を見て、配色や文字の大きさなど、より伝わるにはどうしたらよいかを考える。 <p>【主】作成したものを使って、校内の子供・保護者・地域の方々に発信する。(学習発表会) ②【知③】</p>
米づくりにチャレンジ！⑰	<p>※本小単元は時季が関わってくるため、春と秋に分けて実施する。</p> <p>【関】食料自給率、食品ロスの問題を自分のこととして捉え、食料の大切さを理解し、食料生産に関心をもつ。②【知①・思①・主①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料を基に食の大切さを感じ、食糧生産に関わる人々の苦労や努力に目を向ける。 <p>【関】田植えや収穫の体験活動、稲の生長の観察を行う。④【知②・思②・主①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験活動を行うことで、食糧生産の苦労や努力を理解する。 <p>【関】米づくりや稲の生長に関することについて、ゲストティーチャーの話を聞く。④【知②・思②・主①】</p> <p>【整】収穫した米を使った調理実習の計画を立てる。③【主②・思③】</p> <p>【主】調理実習をする。②【知③・主③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験活動を通して、食の大切さを理解する。 <p>【主】これまで学んできたことを振り返り、食品ロスの問題解決のために、自分たちができること（しなければならないこと）を考え、表現する。②【主①】</p>

(4) 考察

ア 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

○ 課題設定のための資料提示の工夫

食品ロスの問題を自分のこととして考えるために、まず身近な給食の残菜量を取り上げた。単元の最初に自分たちの学級と、学校全体の残菜量を確認したことで、子供たちは、「どうして残してしまうのだろう。」という思いをもった。



図2 第1時提示資料

そこから、学級共通のゴール「給食の残菜を0にしよう」を設定できた。

○ 「給食の残菜を0にしよう」という学級共通のゴールの設定と意識の持続

給食の残菜が多いという問題を解決するために、給食に関わる学校の実態を調査した。調査し、整理・分析する中で子供たちは、「食べることの大切さや調理員さんたちの苦労、工夫を伝えることで、食べてくれるようになるのではないか。」「好きなものや旬なものが献立の中にあれば、よく食べてくれるのではないか。」と考えた。単元の最初に学級のゴールを「給食の残菜を0にしよう」と設定することで自分たちにできることを考え、給食中の放送で全校に「残さず食べよう」と呼び掛け、全校で残菜を減らすことにつながった。

また、小単元「食品ロスの実態を調べよう」では、学校給食の残菜から日本の食品ロスに視野を広げて学習した。子供の振り返りでは「給食の残菜を減らせたことは、日本の食品ロスの問題の解決にもつながった。」という言葉があった。この言葉からも、「給食の残菜を0にしよう」という学級のゴールを示したことが子供たちにとって大きな意識付けになったと考える。

イ 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

○ 給食の献立提案とポスター作成

本単元は、本研究の「社会参加の形」の「社会の課題に対する自分の役割を自覚する」及び「社会の課題に対する自分の意見を発信する」に位置付けた。「残菜を減らす献立を提案する」学習活動で提案した献立が、10月、11月に出された。その日の学校全体の残菜は、年度当初の残菜量から半減以上の削減となった。振り返りでは、「クラスの人が考えた給食が出て、その給食でデザートが残菜0になったのがとても嬉しい。他のものは、もう少し考えれば、みんなで食べられるのかもしれない。」と、残菜量を減らすことに貢献できた喜びと、学校をよりよくしていきたいという考えをもった。さらに、子供や保護者、地域に食品ロスの問題を解決することの大切さを伝えるために、ポスターを作成し学習発表会で展示した。



図3 給食を提案する様子

○ 伝えた相手からの反応や発信したことの成果

学習発表会で展示したポスターを見た他学年から「苦手なものも食べてみようと思った。」などの感想を得た。



図4 学習発表会で展示したポスター

また、リサイクルセンターから、「ポスターをリサイクルセンターに掲示して、市内に呼び掛けませんか。」と提案された。自分たちの取組が社会により影響を与えていることを実感している様子だった。

子供の振り返りを以下に示す。

「食品ロスの問題解決に貢献できた。これからも貢献していきたい。」

「大切なことは、自分たちだけでは、まだまだ0にできないと思うので、調理員さんたちにも協力してもらったり、学校みんなに協力してもらったりして、みんなで力を合わせて食品ロスを0にしていきたい。」

「食品ロス0プロジェクトを通して、命の大切さと食品のつながりを知ることができた。」

「食品ロスの実態を知ること、食品ロスの問題をどうにかしたいと思うようになった。食品ロス0プロジェクトが終わっても、プロジェクトを続けていきたい。」

子供は、食品ロスの問題について自分のこととして考え、給食の献立提案やポスターによる発信を通して社会に参加してきた。この学習を通して、子供は自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりすることができた。

三小の給食残飯量		4月28日調べ 31kg	
(10月4日調べ)	(10月20日調べ)	(10月26日調べ)	
14kg	6kg	9kg	
残菜率 田舎うどん 2% さつまいもの天ぷら 8% 製シャーベット 0%	残菜率 焼きそば 1% ベイクドポテト 1% フロッコリーサラダ 1%	残菜率 キムチチャーハン 1% けんちん汁 3% フルーツポンチ 1%	
			

図5 提案した献立の成果資料

実践事例3 発見！地域の宝（小学校第5学年）

(1) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

地域で働く人々や地域に携わっている人々との関わりを通して、町づくりのために尽力してきた人々の思いや願いを理解し、地域の一員としてよりよい町を未来につなげていくために自分たちにできることを考え実践しようとする態度を養う。

イ 評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
①よりよい町づくりのために尽力してきた人々の思いや願いを理解する。 ②インタビューによる調査活動や町の探索活動を、相手や目的に応じて実施している。 ③自分たちの町を未来につなげていきたいという自らの認識の高まりは、探究的に学習してきたことの成果であることに気付いている。	①地域散策や地域で働く人々等との交流を通して、地域のよさを見付け、課題を見いだしている。 ②よりよい町づくりの実現のために必要な情報について、手段を選択して多様に収集したり、種類に応じて蓄積したりしている。 ③課題解決に必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関連付けたりしながら解決に向けて考えている。 ④よりよい町づくりに向けた自分の考えを、相手や目的に応じて分かりやすくまとめている。	①体験や出会いを通して、よりよい町づくりへの関心をもち、自ら問いを見だし、解決しようとする。 ②友達と協働してすすんで課題解決に取り組もうとしている。 ③地域で働く人々や地域に携わっている人々との関わりを通して、地域の一員である自覚をもち、よりよい町を未来につなげていくために自分たちにできることを見付けようとしている。

(2) 単元設定の理由

単元の学習を地域で働く人々との関わりや社会科の学習と関連付け、地域に根付いている工業や地域振興のよさに気付くとともに、その中で子供なりに課題を見だし探究していくことを通して、地域の人々の思いや願いに触れ、地域の一員としての自覚をもたせる。また、自分たちの住む町を持続可能な町にするために自分にできることについて考え、実践することで、ねらいとする子供の育成につながると考え、本単元を設定した。

(3) 単元指導計画【全42時間 ○内は時間数】※研究に関わる部分を太字で表記

		□主な学習内容 罫：課題設定、罫：情報の収集、罫：整理・分析、罫：まとめ・表現 ・学習活動 【評価】
に学ぶ ⑧	過去の偉人	罫地域で活躍する工業の企業ができた歴史を知り、町づくりへの課題意識を高める。①【思①】 罫企業で働く人と交流し、物づくりや町づくりの視点で調査する。③【主①・知①】 ・本校学区内に会社がある企業の方による出前授業 罫「工業と町」で気付いたことを整理する。①【思②】 罫発見したことをまとめる。③【思④】
う ⑩	地域の宝マップを作る	罫地域の現状を知るための計画を立てる。⑥【知①、思①、主①②】 ・町の人口推移予想などのデータから、町を取り巻く現状を知る。 ・市役所が行っている町の魅力を発信する取組を知る。 ・「どのような町になってほしいか」、「そのために自分は何ができるか」について考え、町の魅力に対する視野を広げ、町を歩く視点をもつ。 ・大学の研究室の方々と町を歩き、発見した町の魅力を共有する。 ・町の魅力を「人」、「子供」、「環境」、「店」の4視点で分類し、これから見付けていきたいテーマを選ぶ。 罫テーマに沿った視点で繰り返し町を歩き、町の魅力について情報収集する。⑥【思②・知②】 罫情報を整理し、「地域の宝マップ」に載せたい内容を決める。②【思③】 罫「地域の宝マップ」を作成し、学習をまとめる。⑥【思④・主②】
う ⑭	地域の宝を伝えよう	罫「地域の宝マップ」の活用方法を話し合い、活動計画を立てる。①【主③】 ・町の魅力を伝えることでどのような町になってほしいか話し合う。 罫罫罫子供が作成した地図の活用方法を調査し、実践する。⑩【思②③・主②】 ・公民館、地域の施設、店舗などに掲示する。 ・校内の子供、教師、保護者や、地域にある商店、施設、公民館などで発表会を行う。 ・学校のWebページに掲載する。 罫活動の振り返りをする。②【知③・主③】 ・探究的な学習を振り返り、自分が目指す未来の町への思いをまとめ、これからの生活を考え伝え合う。

(4) 考察

ア 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

○ 身近な人々や町との関わり

課題の設定、情報収集の場面において、地域の人々や町と関わる場面を設けた。

関わる以前は、「おすすめの場所を教えてください。」という問いに対して、回答は、「レストランやスーパーなどの店」、「子供が遊ぶ公園」といった、自分が日常的に行っている場所に限定されていた。繰り返し町の散策を行うことで視野が広がり、多くの魅力を見付けることができた。特に、「通りがかった人が挨拶してくれた。」、「店の人が優しく応対してくれた。」など、地域に住む「人」へ関心が高まったことは、自分たちで歩き、直接関わった経験がないと出てこなかった視点である。

散策後に実施した「調べたことと実際の町の風景の印象はどうでしたか。」の質問では、約5割の子供が町の印象が変わったと回答した(図6)。このことから、歩き慣れた町並みでも散策により視野が広がるのが明らかになった。この散策を1回で終わりにするのではなく複数回実施し、繰り返し対象と関わったことで、町のことを詳しく知ることができ、子供の視野を広げることができたと考えられる。

また、小学校第4学年時に、「地域安全マップ」を作った経験を第5学年の本学習にも生かし、「入りにくく見えやすい」安全な公園や、交通安全に関する看板に注目した子供もいた。

以上のことから、身近な人々や町と繰り返し関わる経験を通して、自分たちは地域の一員であるという当事者意識を高めることができたと考えられる。

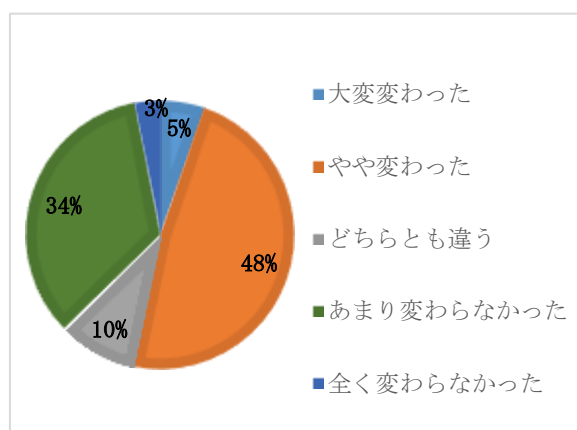


図6 散策後の町に対する印象の変化について



図7 散策の様子①



図8 散策の様子②

○ 掲示物による学びの蓄積（図9）

町を歩いて撮った写真や気付いたことを、地図に随時貼り付けて教室に掲示した。子供が定めた地域のよさを4視点「人」、「子供」、「環境」、「店」で色別のシールを貼ることで傾向を視覚的に分かるようにした。子供自身が更新していく掲示物は毎日見ることができ、日常会話の中でも町の様子が話題になることもあった。

町や人々と関わることを繰り返し、日常的に町の様子に触れることで、これまで気付かなかった事象について考えるようになり、自分たちの町のよさを更に見つけて増やしていくことができた。



図9 掲示物による学びの蓄積

イ 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

○ 単元計画の設定の工夫

本学級の子供は小学校第4学年時に社会事象と十分に対面し、自分にできることを考えて実践する学習を経験していた。そこで、「社会参加の形」の「社会の課題に対する自分の役割を自覚する」ことを重点においた単元計画を設定し、探究的な学習を実践した。また、既習事項や他教科との関連、子供の実態を総合し、小学校第5学年の子供にとっての身近な社会を学区域と設定し、学習を進めた。

学習の始めのアンケート調査では、「自分たちが住む町が好きである。」の質問に対してほぼ全員が、また、「この町にずっと住み続けたい。」の質問に対しては約9割が肯定的な回答であった。そこで小単元「地域の宝マップを作ろう」の課題の設定では、自分たちが住む町がこれから数十年後に人口が1割程度減少する現状を知らせた。子供は、「このままでは大好きなこの町の様子が変わってしまう。」という切実感を抱き、「このよい町が、自分たちが大人になった時にも今と変わらずよい町であり続けてほしい。」と持続可能な町づくりへの願いを強くした。

小単元「地域の宝を伝えよう」では、小単元「地域の宝マップを作ろう」で作った地域の宝マップを多くの人に知ってもらうために、再び町を歩いて調査をした。自分のこれからの生活を考え、自分が目指す未来の町への思いをまとめ、外部に発信することにより、社会への参加につなげることができた。

実践事例 4 豊かな社会とは (小学校第 6 学年)

(1) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

自分たちの住む葛飾区の特徴を調査する活動を通して、葛飾区の行う施策を理解し、町を更に豊かにしていくために自分たちにできることを考え、実践しようとする態度を養う。

イ 評価規準

知識・技能 (知)	思考・判断・表現 (思)	主体的に学習に取り組む態度 (主)
① 葛飾区の魅力について知り、葛飾区の行う施策を理解している。 ② 目的に応じたアンケート調査を行っている。 ③ 目的に合わせた情報収集や整理・分析・表現の方法を理解している。	① 町を更に豊かにするために情報を場に適した方法で収集している。 ② 自分たちにできることを考え、収集した情報を整理・分析し、活用している。 ③ 伝える相手や目的に応じて、自分の考えをまとめ、適切な方法で表現している。	① 自分も地域の一員であることを自覚し、町を更に豊かにすることを考え積極的に関わろうとしている。 ② 体験したことや調べたことを友達と共有し、自分と違う考えを生かしながら、協働して課題解決に取り組もうとしている。 ③ 課題と自分の生活を関連付けて自分の生活を見直し、課題解決に向けてのめあてをもったり振り返ったりしている。

(2) 単元設定の理由

葛飾区は、日本経済新聞社による令和 2 年の SDGs に関する調査で全国 815 の自治体の中で、経済・社会・環境の総合部門で第 3 位となっている。素晴らしい魅力であるが、ランキングのことやそれ以外にも多く存在する葛飾区の魅力に気付いていない子供も多い。子供は自分の住む町の魅力を知っていくことで、郷土愛が増し、自分の町に対する誇りも高まっていくと考えた。自分の住む町を更に発展・維持させていくことは、将来自分が住み続けていく上で他人事ではない。町の魅力を知り、町や社会のために自分たちにできることに率先して参加していく行動力を身に付けさせたいと考えた。

(3) 学習指導計画【全 33 時間扱い ○内は時間数】※研究に関わる部分を太字で表記

	□主な学習内容 課 ：課題設定、 情 ：情報の収集、 整 ：整理・分析、 ま ：まとめ・表現 ・学習活動 【評価】
は 社 豊 ① 会 と かな	課 葛飾区の魅力を探る。①【主①】 ・知っている葛飾区の魅力をウェビングマップで共有する。 ・今後の葛飾区に望むものを考える。
私 と あ な た の 町 ⑬	情 どのような魅力があるか調べる。①【知①】 情 区役所の方々を招いて、町を豊かにしている取組を知る。②【知①】 情 葛飾区の魅力を更に深く調べる。①【知①】 情 葛飾区のイメージを町の人に尋ねる。(アンケート調査の作成)【知③】 整 アンケート調査結果から分かったことを整理・分析する。②【思②・主①】 情 地域の方々を招いて葛飾区の魅力や今と昔の違いをインタビューする。②【知③】 整 自分で調べた葛飾区の魅力と区役所の方々・地域の方々に教えていただいた取組について情報を整理・分析する。③【知③】 ま 分かったことを共有し、次時の課題を決めていく。②【思③・主③】
に 込 め て ⑦	課 葛飾区の取組について理解した上で、より豊かな町にするための課題を設定する。①【主①】 情 SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」を意識して、福祉体験をする。③ ・体験例 視覚障がい…アイマスク体験 肢体不自由…車いす体験 高齢者体験…高齢者疑似体験 聴覚障がい…会話の仕方についての体験 情 外国人を招いて日本での生活を通しての課題をインタビューする。①【知③】 整 福祉体験と外国人へのインタビューから分かったことや考えたことを整理・分析する。①【思②】 ま 分かったことを共有し、次時の課題を決めていく。①【思③・主③】

君が町を変えていく⑫	<p>課共有した内容からどのようにして町をより豊かにしていくか課題を設定する。①【主①】</p> <p>情体験してきたことやインタビューを基に理想の町を考える。②【主③】</p> <p>整思い描いた理想の町を表現する準備をする。③</p> <p>までき上がった理想の町を保護者や地域住民・他学年に発表する。③</p> <p>ま区役所の方々を招いて、理想の町を紹介する。①</p> <p>課自分の生活を見直し、今後どのように生活していくか考える。②</p> <p>・学んできた内容について考えることは、本単元終了後も、身の回りの環境をより豊かにしていくために継続していく必要があることを共有する。</p>
------------	---

(4) 考察

ア 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

町の課題に関わる方と接する機会を設けたことで、課題がより自分たちの身近なものであるという意識が高まり、解決しようとする意欲を高めさせていくことができた。以下、課題に関わる方と出会う機会を設けた実践例である。

○ 区役所の方々を招いて話を聞いたことで、子供は、「自分の住んでいる町は、すごい町だ。葛飾区の魅力を深く知りたい。」と意欲をもち、その後の学習で主体的に探究する姿が見られた。

○ アンケートを用いて区内、区外の人に魅力や課題を聞き、真剣に答えてくれる町の人や普段から関わりのある施設が快く協力してくれたことを実感できたため、子供から、「人の優しさがあふれる自分の住む町を大切にしたい。」という声が聞かれた。

質問 あなたが思う葛飾区の魅力があったら一つだけ教えてください。

① 貧困に関する取組がされていること
 ② 食事や食べ物に関すること
 ③ 健康・福祉に関すること
 ④ 教育関係
 ⑤ ジェンダー平等について取組がされていること

図 10 実際に使用したアンケート

○ 区の SNS や Web ページにもアンケート調査が掲載され、区役所内に本校のアンケート調査の展示ブースを作った。区役所が自分たちの活動を応援してくれていることを感じ、学習に対して真剣に取り組む姿が見られた。

○ 福祉体験を行うことで、どのくらい困ることがあるのかを体験することができ、住民全員が幸せになるような町にしたいという考えが深まった。

イ 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

本単元では葛飾区の魅力を探るということを探究課題とした。本研究で小学校第3・第4学年の「社会参加の形」で設定した、「社会事象を知る・実感する」体験を十分に味わえる機会を設け、小学校第5学年の「社会参加の形」で設定した、「社会の課題に対する自分の役割を自覚する」につながる流れを作った。

小単元「君が町を変えていく」では、葛飾区の魅力や課題を整理・分析し、「自分の考えに基づいて社会に発信する」段階まで進めた。他学年の児童や保護者、区役所の職員などに向けて、伝える相手や目的に応じて表現方法を適切に選び発信した。子供は、「町のために、私たちにできることを考え、実行していくことが、自分が将来も住み続けたい町につながっていくのだと実感した。」と振り返っており、社会への参加の意欲が高まっている様子が見られた。

実践事例 5 未来へつなぐ平和プロジェクト（中学校第3学年）

(1) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

社会科歴史的分野、近現代の日本において学習し、理解したことを生かし、ICT を活用して、プロジェクションマッピングを作成し、東大和市にある戦災建造物「旧日立航空機株式会社変電所」の模型への投影を通して、社会に平和を発信する。

イ 評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
①持続可能な社会を形成していくためには、自分たちが主体となって平和をつないでいくことが重要であることを理解している。	①なぜ日本が戦争をしてしまったのか、グループでの話し合いを通して、多様な側面から考え自分の意見を発表している。 ②プロジェクションマッピングを通して、平和を発信するために他者と協働して作品を制作し、よりよい社会の実現に向けて意見や考えをまとめたり、表現したりしている。	①社会科歴史的分野、近現代の日本において学習した内容と、東大和市の歴史を関連付け、平和を形成していくことは自分たちの課題であることを認識し、解決しようとしている。 ②作品を実際に変電所へ投影し、市役所や地域住民、保護者へ発表することを通して、平和をつくる主体として自分たちの学習成果を発信している。

(2) 単元設定の理由

東京都立東大和南公園には旧日立航空機株式会社変電所があり、古くから「西の原爆ドーム、東の変電所」と称され、平和を伝える施設として地域住民に大切にされている。

そこで本単元では、一人一人が歴史から「平和」を問い直し、プロジェクションマッピングを活用して社会に平和について学んだことを発信することを通して、自ら行動を起こしていくことをねらいとし、持続可能な社会の当事者の育成を目指した。

(3) 単元指導計画【全 35 時間 ○内は時間数】 ※研究に関わる部分を太字で表記

	□主な学習内容 ㉒：課題設定、㉓：情報の収集、㉔：整理・分析、㉕：まとめ・表現 ・学習活動 ㉖【評価】
て 平 和 に つ い て 考 え る。 ⑮	㉒ 平和について課題意識を高める。①【知①】 ・社会科歴史的分野で学んだことを想起して、平和をつくる主体として課題意識を高める。 ・自分たちが生活する地域も戦争と関係があったことを意識して、当事者意識を高める。 ㉓ 平和への過程を歴史から学び、様々な視点から調査・協議し、自分の意見をまとめる⑨【知①・思①・主①】 ㉕ 平和をつくる主体として、自分にできることをレポートにまとめる。⑤【知①・思①・主②】
平 和 を 表 現 す る。 ⑯	㉓ 平和について発信する方法としてプロジェクションマッピングを学ぶ。①【知①】 ・外部講師を招き、プロジェクションマッピングの制作方法について学習し、平和をどのように発信するか課題意識を高める。 ・プレゼンテーションソフトの操作でできることを整理する。 ㉔ 平和について様々な議論を通し、平和をつくる主体として自分にできることを整理する。①【知①】 ㉕ 一人1台端末を活用し、グループで協力して、どのような表現をしたいのかについて話し合い、プロジェクションマッピングを制作する。⑫【知①・思②】 ・中間発表を通して仲間にアドバイスをもらう機会をつくり、修正する。 ㉔ 国連平和維持活動に参加経験のある外部講師から平和について学ぶ。①【知①】 ㉕ 制作したプロジェクションマッピングを発表する。⑤【主②】 ・クラスや学年発表後に、保護者や地域住民に発表する機会を設ける。

(4) 考察

ア 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

東大和市が文化財に指定している旧日立航空機株式会社変電所には、太平洋戦争の爆撃によってできた無数の傷痕がある。本市もまた戦争の舞台であり、8月には市をあげて平和月間事業を毎年開催しているほど平和への意識は高い。そのような地域資源や地域の歴史と社

会科歴史的分野の既習事項とを関連付けながら授業を展開することで、子供は平和についての問題を自分の問題として捉えるようになった。

また、お互いの考えを伝え合い、単元のゴールに設定した発表がよりよいものとなるように議論を重ねることを通して深い学びを提供できるように工夫した。

これらの活動を通して、平和について真剣に話し合う子供の姿が見られた。



図 11 平和についての思いを付箋に書いて共有



図 12 平和について話し合いをしている様子

イ 子供の発達段階に応じた社会への参加につなげる工夫

子供が持続可能な社会を形成していく当事者として行動することができるように、本単元では、平和というテーマについて考えて、自分たちの思いを表現したプロジェクションマッピングを制作、投影し、保護者や地域住民に向けて発表することを単元のゴールとして設定した。他教科での既習事項を活用・発揮させながら話し合いを行うとともに、海外で平和活動の経験がある外部人材からアドバイスをいただいたことで、平和への願いを強くし、自分たちでも社会を変えられるという意識をもって、行動している子供の姿が見られた。

また、子供同士だけでなく、保護者や地域住民を招待して発表を行うことで、自分たちの行動が平和をつないでいくために役立っていると実感しているようであった。本単元でのこれら一連の取組を通じて、子供主体で行動し、課題解決を図る姿が見られた。



図 13 プロジェクションマッピングを作成している様子



図 14 プレゼンテーションソフトの画面

VI 研究の成果と課題

1 成果

(1) 社会の課題を自分のこととして考えることができる課題の設定の工夫

本研究では子供が実社会、実生活に向き合う中で自ら課題意識をもつことができるように給食や飼育といった、子供にとって日常生活と密接につながる事柄、地域散策に加えて地域産業や歴史的な建物など、身近にある地域資源を活用するとともに、その意識を継続して発展できるように役所や大学の研究室など様々な立場の外部人材を活用して課題を設定した。

その結果、子供からは、「知らなかった。」、「直接自分に関わっている問題である。」、「地域の人と協力して、みんなで解決したい。そのためには具体的な行動を考え、提案しなければならない。」、「今動かなければ未来の町は変えられない。」などの声が聞かれ、自らの手で課題を解決しようとする意欲が高まっている様子が見られた。

課題の設定

実践事例	課題の設定
1	地域資源である養蚕や地下水、アキシマクジラを通して地域の魅力を発見しよう。
2	自分たちの学級と学校全体の給食の残菜量を知ることで、食品ロスの問題を考えよう。
3	今まで意識せずに過ごしてきた町のよさや魅力を見だし、地域の一員であることを自覚しよう。
4	アンケート調査や区役所の方の話を通して町のよさや現状を知り、自分の手で町をよりよくしよう。
5	地域の施設から歴史を学び、平和についての自分の考えを発信しよう。

(2) 子供の発達の段階に応じた社会への参加につなげる工夫

発達の段階に応じた「社会参加の形」を目安として活動を展開することで、子供が身近な社会に目を向け、視野を広げる様子が見られた。具体的な姿として、学級内の発表を通して自分の行動が周囲にいい影響を与えていることが分かり、「他学年や学校全体、地域にも発信したい。」という思いをもつ子供の姿が見られた。また、地域から国や世界にも目を向けて、自分たちができることを子供同士で話し合う姿が見られた。

実践活動例

実践事例	実践活動例
1	・「地域の特徴」ポスター、劇、クイズ、体験コーナーなどで他学年、保護者に発表
2	・給食献立の提案、「食品ロス削減アイデア」ポスターを学校や市の催し、施設にて展示
3	・「地域の宝マップ」を公民館、地域の施設、店舗へ掲示、学校の Web ページにも掲載 ・他学年や保護者、また、地域にある商店、施設、公民館などで発表
4	・「理想の町デザイン」ポスター、紙芝居、劇、プレゼンテーションなどで他学年や保護者等に発表
5	・「平和をつくる主体として私にできること」レポート作成 ・「平和」プロジェクションマッピングを学級で発表。代表作品を校内で投影発表

2 課題

地域資源や外部講師を活用して様々な視点から課題を設定することで、子供は自分のこととして考えることができた。一方、持続可能な社会を目指す未来の創り手を育成するためには、一つの側面だけで課題解決を考えてしまうと難しく、学びを深める中で視野を広げていくことが課題である。探究的な学習の過程を重視するという、総合的な学習に時間の基本に立ち戻り、子供の立場に立って手だてを考えることが大切であることが分かった。図1「社会参加の形」を用いて研究を進めたが、学年が上がるにつれ、子供の実態によっては一律に進むのではなく、各段階を行き来する必要がある。子供の状況を把握し、各段階にいる子供一人一人が目標に向かっていくことができるように、今後、個に応じた社会参加の方法を考える必要がある。

令和4年度 教育研究員名簿

小・中 合同・総合的な学習の時間

学 校 名	職 名	氏 名
葛飾区立上小松小学校	主任教諭	田村和明
昭島市立拝島第三小学校	主任教諭	武田友里子
小平市立小平第三小学校	主任教諭	◎丹野洋次郎
日野市立日野第五小学校	主任教諭	小坂亜希
東大和市立第二中学校	主任教諭	高田裕行

◎ 世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課

指導主事 東小川 智史

令和4年度
教育研究員研究報告書
小・中 合同・総合的な学習の時間

令和5年3月

編集 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849